プラン・ニュース［ 2019 Spring ］ NO.110

PLAN NEWS



国際女性デー 2019

角田光代さん×増田明美さんトークイベント
「夢を実現するために」

ラオスのガールズ・プロジェクトの進捗報告

プランのコミュニティ開発
ミャンマー
チャイルドの登録プロセス紹介
～マンダレー活動地域～

発行：公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン

国際女性デー スペシャル・トーク

女の子の夢を実現するために、私たちにできることとは?

3月8日の「国際女性デー」を記念してプラン・インターナショナルが
国際女性デー2019 トークイベント「夢を実現するために」を東京・六本木で開催。国際協力・ジェンダー専門家で
プラン理事の大崎麻子さんが、女性のリーダーシップの重要性などについて基調講演を行いました。
加えて、大崎さんを聞き手に、作家の角田光代さんとスポーツジャーナリストの増田明美さんが、
支援先を訪問したときに気づかされたことや女性のリーダーシップについてトークを繰り広げました。
その様子をお届けします。

撮影：金井塚太郎



大崎麻子(左)

おおさきあさこ：米国コロンビア大学で国際関係修士号(国際人権法・人道問題)を取得。国連開発計画(UNDP)開発政策局などを経て、現在は、フリーの国際協力・ジェンダー専門家として幅広く活躍。

角田光代(中)

かくたみつよ：1990年に『幸福な遊戯』で海燕新人文学賞を受賞しデビュー。その後『対岸の彼女』(直木賞)、『八日目の蝉』(中央公論文芸賞)、『かなたの子』(泉鏡花文学賞)、『私のなかの彼女』など著書多数。

増田明美(右)

ますだあけみ：1984年のロス五輪に、マラソン日本代表として出場。現在はスポーツジャーナリストとして活躍中。大阪芸術大学教授。2008年10月、プラン・インターナショナルの評議員に就任。

自信をつけて女の子が大きな声で話せるように

大崎麻子さん(以下略)　お二人には、これまでに数カ国の視察をしていただきました。まずは、どのようなプロジェクトをご覧になったのかと、印象的だったことを教えてください。

角田光代さん(以下名前と敬称略)　2009年にマリを訪れて以来、インド、パキスタン、ヨルダンへ足を運びました。行くたびに新発見があります。どこも強烈な思い出があるのですが、マリで、女性性器切除の慣習をやめた村に、急な崖をよじ登ってようやくたどりついたことは、忘れられないですね。

増田明美さん(以下名前と敬称略)　2010年にラオス、それから4年ごとにトーゴ、ベトナムを視察しました。成功体験を積み重ねて自信をつけ、変わっていく女の子の姿を見られたのが印象的です。トーゴに女の子だけのサッカーチームができて、女の子が大きな声で話せるようになったり将来の夢を語るのを見たときは、道が開けていくと感じました。

――声の大きさが変わるのは、エンパワーメントの象徴的なことですよね。ベトナムの山岳地域でも、お母さんに識字教育をしたら、自信がついてどんどん声が大きくなるということがありました。増田さんがラオスの山岳地帯で会った子どもたちの写真はみんな笑っているのが素晴らしいですね!

増田　電気も何も通っていない村に、プランが建てた幼稚園を作ったのを視察に行ったときのものです。最初は子どもとなかなか打ち解けられなかったのですけれど、「丘まで走ろう」と提案したら、みんな笑顔で走ってくれたんです。先生が「彼らはお使いのために走ることはあるけれど、走るために走ったことはない。スポーツという捉え方をしたのが初めてで、楽しかったんだろう」と話してくださいました。



シリア難民のキャンプの子どもと角田さん
撮影：Mayumi Rui (Noir)

インドの虐げられた女性たちの怒りに希望を見た

増田　角田さんは女性性器切除や売春など、とくに深刻な問題を視察されているように思います。気持ちが暗くなること、ありません?

角田　暗いですよ。視察の前は毎回、「これから楽しくない旅が始まる」と思いますよ(笑)。インドの売春婦が暮らす村で話を聞いたときも、自分を差別してきた人への恨みを怒りながら訴える女性の姿を見て、気持ちが暗くなりました。でも途中でハッと気づいて、彼女はプランの教育のおかげで「カーストで差別されるのはおかしい」と考えられるようになったのではないかと思ったんです。つまり、今までは怒ることさえできなかった。彼女の怒りは絶望ではなく希望であると、そのとき私は受け取りました。



ラオス山岳民族の子どもと走る増田さん
撮影：鬼室黎

増田　確かに、怒れるっていいですよね。私が暗い気持ちになったのは、ベトナムの山岳地帯で赤ん坊を抱っこした女の子に会ったときです。若いので妹の面倒を見ているのかと思ったら、自分の子どもだと話しました。13歳で妊娠して父親は逃げたと言うのを聞いて、切なさを感じました。みんなが学校で勉強できたらいいのに、と強く思いました。

――教育は本当に大切で、プランの活動の中核を成しています。夢を実現するためにも、自分の人生を自分で決めながら生きるためにも、まずは知識や技術の習得、つまり教育が必要だからです。そして、その先にあるのが「経済的な自立」です。経済的に他者に依存しているということは、自分の人生・生活・命を他者に預けているということになるからです。今、女の子の経済的自立はエンパワーメントの最重要課題のひとつです。おそらく、女の子が経済力をつけるためのプロジェクトも視察されたとうかがいました。いかがでしたか。

角田　インドの職業訓練で学んだ女の子がお店を出し、その様子を見てみんなが励みにしていました。成功パターンを知るのはいいことだと思いました。

増田　ハノイで、プランが女の子たちに調理師や美容師になる技術を教えているのを見ました。マラソンと同じで、職業訓練は地道な作業だと思いました。すぐに結果が見えるわけではないから。

――食べ物がないからお米をあげるのではなく、どうやってお米を作るのかを伝える。コミュニティ・レベルでの開発支援は、確かに時間がかかります。プランが支援している多くの地域では、地元出身者が地域事務所の職員になって、彼らがフロントになり、まずは長老や村の人と信頼関係を作ります。それで初めて、何らかのアクションができるからです。支援の道のりは、本当にマラソンのように長いです。

女の子や女性がリーダーになるために

――途上国でも日本でも、よりよい未来を築くために、女性リーダーが必要とされています。プランも、女の子のリーダーシップ教育に取り組んでいます。リーダーシップを発揮するには、どんな力が必要だとお考えですか?

増田　何か舞台を作ってあげるのが大切だと思います。スポーツでも音楽でも学問でも、何か女の子が発表できる機会を作り、褒めて、自信をつけさせてあげる。

角田　日本にも女の人が大学にいかなくてもいいと言われていた時代がありました。高学歴だと「もらい手」がないというような、暗黙の了解が社会にあったからだと思います。今の時代にもこういうはっきりとは言語化されない差別みたいなものはある。それを、少しずつでもなくしていくことではないでしょうか。

――増田さんと角田さんはそれぞれの分野の第一人者としての地位を築き、社会に多大な影響力もお持ちです。最後に、お二人が女の子や女性のリーダーシップを育むために、今後したいと思っていることを教えてください。

増田　スポーツ団体の役員は、いまだに女性が圧倒的に少ない。こういうところから改善していかなければならないと、考えています。男性を敵に回すのではなく、上手に協力しながら。

角田　私がデビューした40年前は、文学賞の選考委員は男性ばかり。女性の作家はどこか軽んじられる面もありました。それが変わり、〝女流作家〟という言葉もなくなったのは、女性の作家たちが戦ってきたからだと思います。私が今、好きに小説を書けるのは、先達の作家たちのおかげです。今度は、私が後ろに続く人に何ができるのか。次世代に問題をそのまま引き渡さないようにしたいですね。そのためには、暗黙の了解みたいなものに敏感になり、「これでいいのか?」ときちんと自分に問い続けることが大切だと思います。



最後に来場者と共に記念撮影を実施!
撮影：金井塚太郎

ミャンマー

多くのボランティアに支えられて チャイルドに寄り添う支援をすすめる

プラン・インターナショナルは、2015年にミャンマー中部のマンダレー活動地域で
プラン・スポンサーシップを通じた支援を始めました。38村から始めた活動は、現在は100村にまで広がり、
来年度はさらに支援の対象となる村が増える予定です。チャイルドの登録が比較的新しい国・地域で、
どのようにチャイルドが選ばれスポンサーと交流を始めるのか。そのプロセスをご紹介します。



ミャンマーってどんな国？

豊かな天然資源を有する一方、厳しい政治・経済状況により低迷が続いていました。近年、経済発展への期待から都市部への人口流入がみられますが、農村部に暮らす人々の多くは貧困状態にあり、都市部との格差が広がっています。マンダレーに暮らす人々のおもな経済活動は自給自足の小規模農業で、稲、ゴマ、落花生などを栽培しています。





識字率が低い地域のため、図や絵なども使って説明します

Step.1 プラン・スポンサーシップを地域に説明する

地域の現状調査を終えたら、まずはチャイルドの登録を行います。その際には、住民たちに「プラン・スポンサーシップとは何か」を十分に理解してもらうことが必要です。マンダレーの活動地域では、スタッフが同じ村を何度も訪問し、少人数のミーティングや戸別訪問でプラン・スポンサーシップについて説明します。住民からは「スポンサーってどんな人？」と質問を受けることが多く、「すべての子どもたちが性別や障がいの有無によって差別されることなく、成長できるように応援してくれる存在。なかには、チャイルドの国や文化に興味や関心が高い人もいる」と伝えています。また、活字に頼らず絵や寸劇を用い、理解を深めてもらいます。

チャイルドとスポンサーの交流で得られることは？

- スポンサーは、チャイルドの成長を見守りながら、チャイルドの目を通して、プランの活動成果を実感できる。
- お互いが知らない文化を学び、視野を広げることができる。
- チャイルドは自分の考えを言葉にして表現したり、文字を書く能力を向上することができる。



プランから説明を受ける子どもたち

Step.2 チャイルドを選ぶ

マンダレーの活動地域では、右のような選考基準を定めています。そのほか、プランの活動に積極的に参加することも求められます。年少の子どもや、地域の価値観で立場が弱い女の子が優先的に登録されることが多いのも特徴です。不公平感を生まないために、最終的には地域の話し合いや合意で決まります。家族のなかでどの子にするかも、話し合いで決めます。

ミャンマーのチャイルドの選考基準

- 0 歳～12 歳までの子ども
- 一家族から原則として2人まで
- 過去 6 カ月以上、同じ地域に暮らしていること
- ほかの支援団体から支援を受けていないこと

※チャイルドの選考基準は国や事情によって異なります

Step.3 チャイルドの資料を作成

地域を担当する職員またはコミュニティ・ボランティアがチャイルドを訪問し、インタビューを行います。子どもが回答しやすい雰囲気のなかで、プランが定めたインタビューのガイドラインに則って行うなど、細心の注意が払われます。さらに、家族にもチャイルドの情報の聞き取りを行い、最初の紹介資料である「チャイルドのプロフィール」を作成します。



家族に説明する担当職員

写真を撮るのは大変！

チャイルドの写真を撮影するときは撮られることに慣れていない子どもたちが緊張することも！　遊んだり、家事の手伝いをしたりする様子を撮影しながら、カメラに慣れてもらうこともあります。プランは細心の注意を払い、チャイルドに負担感を与えないように、撮影しています。そのためにはボランティアとチャイルド、家族の信頼感が大切です。また、スポンサーに届ける写真だからと、自分で精一杯のおしゃれをする子どもが多くみられるのは微笑ましいです！

Step.4 コミュニティ・ボランティアが大活躍



コミュニティ・ボランティアと一緒に手紙を書くチャイルド

プランとチャイルド、家族、そしてコミュニティの橋渡しをしてくれる大切な存在が、コミュニティ・ボランティアです。チャイルドの手紙書きを手伝ったり、チャイルドや家族に何か異変が起きたときには真っ先にプランの職員に知らせてくれたり、スポンサーにお届けする「チャイルドの一年の歩み」の作成を手伝ったり……。日々自分の仕事もあり時間が限られているなかで、たくさんの任務が任されています。彼らの毎日の活躍なくしては、プランの活動は成りたちません。コミュニティ・ボランティアになったきっかけを聞くと、「地域で文字が書ける大人は限られていて、私はそのなかのひとりだった」「プランの活動が村にとってよいことだと思い、協力したかった」などの声が上がりました。

コミュニティ・ボランティアのキンさん（48歳）



子どものために何か役に立ちたいと思い、ボランティアを始めました。最初はトレーニングも大変でした。今ではボランティアとして、自分の得意なこともわかるようになりました。プランの活動は確実に子どもたちの成長を支えていると感じます。プランが活動を終えるまで、ずっとボランティアとして活動したいと思います。



「スポンサーとしてミャンマーを訪れるのが楽しみです！」 宮本 守さん　操枝さん（愛知県）

トーゴ、ホンジュラス、カメルーンの支援が終わって2017年よりミャンマーのチャイルドのスポンサーをしています。昨年末に、チャイルドから「私のコミュニティに来てください」という内容の手紙が届きました。プランの活動をより理解するにはとてもいい機会だと思い、早速事務局に問い合わせました。日本の文化などに興味を持っていただけるようなアイデアを巡らせ、11月末の訪問を楽しみにしています。

ラオス

女の子がリーダーシップを発揮する地域に変化

プラン職員が見た、ガールズ・プロジェクトの現場とは？
支援先で出会った人々の生の声から職員が感じた課題まで、
レポート形式でお届けします。

レポーター　プログラム部職員　長島千野



長島職員（写真前列左端）とラオスの女の子





トレーニングによって、女の子も黒板の前で堂々と発言できるようになりました

ラオスってどんな国？

東南アジアの内陸に位置する山岳国。人口の多くが、農村地帯や孤立した山地の村落に住んでいます。49の民族と言語があり、文化的な多様性に富んでいるのも特徴です。ラオス北部に位置するボケオ県パウドン郡は住民の80％が少数民族で、国内でもっとも貧困率が高い地域。女の子の教育は軽視されがちで、中学・高校への女の子の進学率が低く、早すぎる結婚や妊娠による中途退学も見られます。

「リーダーは男の子」というジェンダー規範

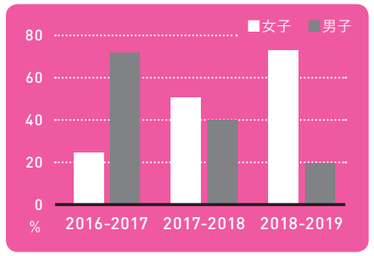
ラオスでは、職場や学校、コミュニティ、家庭におけるリーダーの大多数は男性で、学校の学級委員長もほとんど男の子です。学級委員長は投票で選出されますが、女子生徒がもっとも多くの票を集めても、先生に「女の子は無理だから」と言われ無理やり辞退させられることがあります。あるいは、女の子に自信がないため、投票で選ばれても自主的に辞退することもあると先生や生徒は話します。子どものときから「意思決定をするリーダーは男の子・男性」というジェンダー規範・役割が決まっているのです。このような社会では、女の子・女性の意見が尊重されず、社会的地位が低く、女の子・女性への差別や暴力の原因となります。

女の子の学級委員長の比率が大きく変化

プラン・インターナショナルは、2016年より、ボケオ県パウドン郡で「学校でのジェンダー平等促進」プロジェクトを実施しています。そのひとつが、先生対象のトレーニング。家庭やコミュニティ、学校での男女の不平等とその影響について話し合い、先生たちが「普通」と思っていることが、実は子どもたちに悪影響を及ぼしているという気づきを促しました。たとえば、学校の状況をジェンダー分析し、「あなたの学校には女の子の学級委員長がいますか？」などの質問項目を先生同士でチェックしました。トレーニングの最後には、学校がよりジェンダー平等になるためのアクションプランを作成。多くの学校が女の子の学級委員長を増やすという目的を掲げました。

その結果、プロジェクト開始前後では女の子の学級委員長の比率が大きく変化しました。全10校の平均で見ると、21％だった比率は倍の47％まで改善。そのうち、支援開始1年目の2016年からプロジェクトを続けている4校に限っては、開始前の平均が25％に対して、翌年は55％、その翌年は75％と劇的な変化を遂げています。（※グラフ参照）

学級委員長の男女比



リーダーシップにはいろいろな意味がある

リーダーシップというと学級委員長などの役職で考えてしまいがちですが、私たちはもう少し広い意味で捉えています。女の子が自信や勇気をもてること、そして発言、行動、意思決定ができたり、周りによい影響を与えることができる力も女の子のリーダーシップだと考えます。そして、女の子がリーダーになる機会を増やすとともに、女の子が本来もっている力を発揮するうえでの社会的障壁となっている制度や慣習、規範も同時に変えていかなければなりません。

女の子のリーダーが「普通」の社会を目指して

「プロジェクトを通して、女の子にも権利があり、尊重しないといけないということを学んだ」と話してくれる男子生徒がいました。一方で、女の子の学級委員長の数が増え続ける状況に「男の子への支援はどうなのだ？」と不満の声を出す校長先生もいます。このような反発には、ジェンダー格差の現状と平等を達成するまでのプロセスを丁寧に説明しています。社会的な規範や慣習を変えることには大変長い時間がかかります。女性・女の子がリーダーであることが「普通」である社会にむけて、これからも生徒や先生とともに活動していきます。

「学校でのジェンダー平等促進」プロジェクトによりどんな変化が生まれたと思いますか？

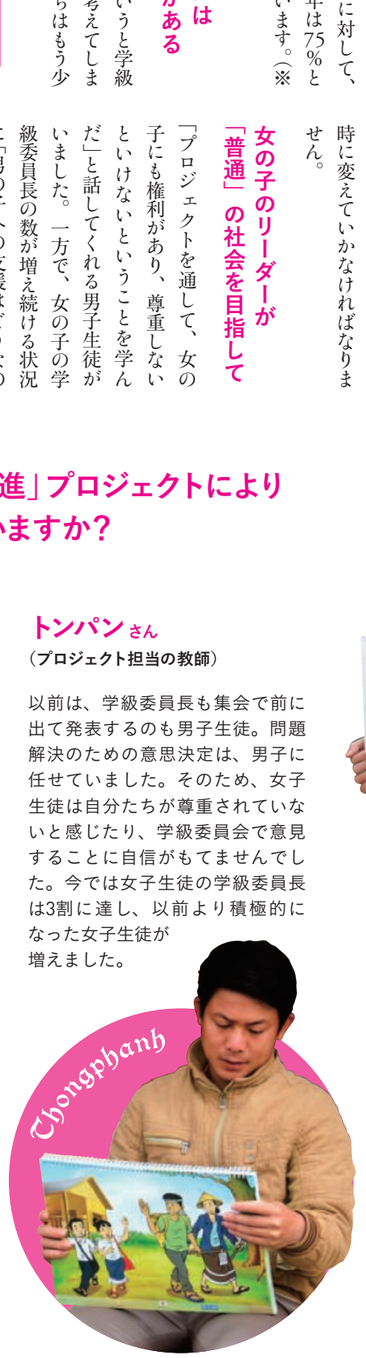


ソムキットさん
（子どもクラブのリーダー/ 高校3年生）

女の子の学級委員長が増えました！私も去年、初めて学級委員長に選ばれて、子どもクラブのリーダーも務めるようになりました。以前は恥ずかしがり屋で人前で話すことが苦手でしたが、プランのトレーニングに参加して、子どもクラブの活動をしているうちに自信がついてきました。今ではイベントの司会をしたり、寸劇で役を演じたり、意見を言えるようになりました。周りの人も私が言うことを聞き入れてくれていると感じます。

トンパンさん
（プロジェクト担当の教師）

以前は、学級委員長も集会で前に出て発表するのも男子生徒。問題解決のための意思決定は、男子に任せていました。そのため、女子生徒は自分たちが尊重されていないと感じたり、学級委員会で意見することに自信がもてませんでした。今では女子生徒の学級委員長は3割に達し、以前より積極的になった女子生徒が増えました。





チャンディーさん
（子どもクラブのリーダー/中学3年生）

自分自身の考え方に大きな変化が生まれました。私はモン族です。モン族の文化では、娘より息子の方が可愛がられます。私の両親も兄弟の方を大切にしていると感じます。でも、子どもクラブのリーダーになってから、ジェンダー平等について知りました。そして、男の子も女の子も同じ教育を受けることができ、同じことができるということを。早速両親にこのことを伝えましたが、まったく聞き入れてくれませんでした。でも私は諦めません。高校への進学を両親がサポートしてくれるか分かりませんが、諦めずに両親に話をしていこうと思います。

「学校でのジェンダー平等促進」プロジェクトの主な活動内容とは？



- 教師184人、保護者52人へのジェンダー平等に関するトレーニングを実施
- 生徒たちが主体となってジェンダー平等について啓発活動を行う子どもクラブを創設
- 182人の子どもクラブリーダーへのトレーニングを実施
- 学校やコミュニティーでの啓発活動
- 学生寮の建設

※このプロジェクトは外務省（NGO連携無償資金協力）との協力により実施しています

「学校でのジェンダー平等促進」プロジェクトはガールズ・プロジェクトのひとつです。ぜひこれからも応援してください。
https://www.plan-international.jp/join/girls/

トーゴ

障がいのある子どもが差別なく教育を受けられる環境づくり

世界では、15歳未満の子ども9,500万人（20人に1人）に、障がいがあるといわれています※。
そのなかには、社会や家族から障がいがあることをよく思われず、いじめやさまざまな偏見を受ける子どももいます。
こうした状況を少しでも改善するために、
プランのグローバル・プロジェクトは
「障がいのある子どもの教育支援」を行っています。
トーゴでの活動を例に、子どもたちがどんな困難に直面しているのかをお伝えします。



道が整備されていないため、車椅子の子どもは通学に時間がかかります

「もの」の支援に加えて人々の意識を変えるアプローチも

プランが活動を行うトーゴの中央州モ県には、障がいのある子どもが3150人います（女の子1550人、男の子1600人）。障がいのある子どもは両親からよく思われず、家の中に隠されてしまったり、いじめの対象となることもしばしばです。グローバル・プロジェクトの「障がいのある子どもの教育支援」は、障がいのある子どもたちへの補助器具の支給やコミュニティの人々への啓発、先生のトレーニングなどを実施。コミュニティ全体を巻き込んだ活動を通じて、障がいのある子どもが差別なく教育を受けられる環境づくりを行っています。



トーゴとはどんな国？

西アフリカにあるトーゴは人口の多くを子どもや若者が占め、ほとんどの人々が農業に従事しています。安全な水の供給や衛生施設が不足しているなど、社会・経済基盤の整備が遅れています。また、とくに農村地域は深刻な貧困問題を抱えています。

Key Word「インクルーシブ教育」

インクルーシブ教育とは、障がいの有無や貧富の差、都市や農村といった居住地による区別なく、すべての子どもたちが分け隔てなく学べる教育を意味します。障がいのある子どもが学校から排除される理由には、国や自治体の財政不足、教育システムの欠陥、障がいに対する社会的偏見、家庭の資金不足、障がいのある子ども自身が発言できる機会の欠如などが挙げられます。そうした状況を変えるためには、補助器具の配布といった「もの」のアプローチのみならず、コミュニティや子ども自身を中心としたリハビリの実施、啓発活動など、人々の意識を変えていく「ひと」へのアプローチが重要です。

Voice from Togo

フッセーニさん（小学校校長）



プランがインクルーシブ教育の重要性を訴える意識啓発活動を行った翌日、私の学校に、2人の障がいのある子どもとその家族が入学を求めてやってきました。彼らは、それまで「障がいがあると学校に行けない」と思い込んでいたようです。

アドジさん（行政官）



プロジェクトの意識啓発で、差別や偏見が少しずつ減っています。教育省だけでは予算が限られており、障がいのある子どもたちへの対応が十分にはできません。プランのおかげで彼らの教育が改善されることに感謝しています。

ナレさん
（プラン・インターナショナルのトーゴ事務所 インクルーシブ教育担当）

モ県には障がいのある人に対する差別や偏見があります。それは地域や学校レベルで、人々の知識が不足しているからです。でも今ではプランの活動が地域に受け入れられてきました。インクルーシブ教育の大切さを、もっと広めたいと思います。

※ 出典：WORLD REPORT ON DISABILITY, WHO-WORLD BANK

Case Story

障がいのある子どもたちのケーススストーリー

障がいのあるトーゴの子どもたちがどのような困難な状況にあるのか。そして、プランの支援によって状況はどう改善したのか。3人の子どもたちの声をお届けします。



case1 私以外に娘と会話する人はいません

ホノさん（10歳）**の母親**

ホノさんは生まれたときに父親が家を出てしまい、母親のコウメさんと暮らしています。生後11カ月で髄膜炎になり、病院で治療を受けましたが視聴覚障がいが残りました。コウメさんは、娘の困難な状況を次のように話します。「娘は耳が聞こえないことでとても苦労しています。私は手話を使いますが、私以外に娘と会話する人はいません。ほかの子どもたちのように遊ぶことができないのです。学校に行っても、友だちにいじめられることもあります。教師は本当に娘が理解できるような教え方をしているとは思えません。周囲の人にひどいことを言われることもあります。このプロジェクトで、娘や同じような困難のなかにある子どもたち、教師に手話のトレーニングをしてほしいと思っています。そして、ひとりでも多くの人に、障がいのある子どもや人々の権利について理解を深めてもらいたいです」



case2 兄弟は家の仕事をしない私を責めます

ムシャットさん（10歳）

一夫多妻の家族に生まれ、3人の母親と10人の兄弟がいるムシャットさん。1歳になる前の注射が原因で足に感染症を起こし、左足の切断を余儀なくされました。ムシャットさんの母親は妹をつれてサウジアラビアに移住しましたがムシャットさんは「自分の足のせいだ」と話します。小学校は自宅から200メートルほどのところにありますが、杖を使うため通学するのは大変です。同級生はムシャットさんをからかったり、仲間はずれにすることもあります。なかには一緒にいると病気になると脅える子どももいます。「家でも学校でも生活は不便です。通学にほかの子の3倍は時間がかかります。教室の前の階段ではいつも転ぶし、遅刻するので同級生が笑います。兄弟は水汲みも畑仕事も手伝えない私のことを責めます。父親が私に優しくすると、嫉妬をしていじわるをするのです」と、ムシャットさん。「私は娘が辛い思いをしているのが耐えられません。プランの支援でもういじめられないように、学校の勉強やさまざまな活動にすべて参加できるようにしてほしい」と、父親のキベリさんはプランの活動に切なる願いを寄せます。

プランの支援を受けて…

case3 学校で楽しく過ごせるようになりました！

アムボールさん（17歳）

アムボールさんは足に障がいがあり、車いすを使って生活しています。数年前に体調を崩し歩行が困難になりました。「学校からの中途退学を余儀なくされ、家に閉じこもるようになりました。学校や地域の人々の障がいに対する理解や関心は低く、いじめにあうこともありました」と話します。プランは障がいのある子どもたちの支援に専門性をもつ地元のパートナー団体と連携し、地域の人々に対して意識啓発をしたり、障がいのある子どもたちが必要なケアを適切に受けられるための支援を実施。アムボールさんは車いすを提供され、学校に通えるようになりました。小学校5年生に転入したアムボールさんは、同級生よりもかなり年長のため、最初はからかわれたりすることもありました。しかし、徐々に子どもたちや学校の教師たちの障がいへの理解が深まり、今では楽しく学校で過ごせるようになったそうです。今でもプランのコミュニティ・ワーカーが定期的にアムボールさんを訪問し、車いすの状態や体調などについて相談にのっています。



「従業員とともにグローバルヘルスを考えていく姿勢を大切にしています」

全世界に約5万人の従業員を有するグローバル企業・武田薬品工業株式会社。
同社では従業員参加型のユニークなCSR（企業の社会的責任）活動を実施しています。
その背景や考え方について、CSRヘッドの圭室さんにうかがいました。



「途上国への支援が次世代の人材育成にもつながっています」と語る圭室さん

圭室（たまむろ）俊雄さん　武田薬品工業株式会社
コーポレート・コミュニケーションズ＆パブリックアフェアーズCSRヘッド



支援対象地域のひとつであるウガンダの南スーダン難民支援の様子

大切なことはわかりやすい言葉で伝える

1781年の創業以来、武田薬品は「誠実・公正・正直・不屈」という4つの言葉に集約されるタケダイズムを培ってきました。これに加えて現在では、「患者さんを中心に考える（Patient）」「社会との信頼関係を築く（Trust）」「会社の評判を高める（Reputation）」「事業を発展させる（Business）」という4つの項目を、大切なバリューと位置づけています。事業のグローバル化が進むなか、従業員に対してわかりやすい言葉で、繰り返し伝えていくことが非常に重要であると考えています。

全世界の従業員の投票で決めるグローバルCSRプログラム

武田薬品では地球規模の保健課題を支援する取り組みのひとつとして、「グローバルCSRプログラム」を実施しています。これは2016年、代表取締役社長CEOであるクリストフ・ウェバーの発案で始まりました。

このプログラムのユニークな点は、全世界の従業員の投票で支援先を決定することです。従業員による投票数は毎年増え続け、2018年度には当時の全従業員の約40％にあたる1万1000人が参加しました。プラン・インターナショナルは2017年にパートナー団体のひとつに選出され、現在世界7カ国で、南スーダン難民とシリア難民の保健衛生の改善のために協働しています。

CSRは若いリーダーを育てる

グローバルCSRプログラムの一環として支援活動地域の視察を希望する従業員を募ったところ、定員の10倍以上の応募がありました。なかには通常業務で患者さんと直接接する機会のない部門からの応募も見られ、十分な医療を受けられない人々の実態を目の当たりにして、「患者さん中心」という意味を実感したようです。こうして一人ひとりが学びを持ち帰り、業務に生かしてもらうことは大切ですし、次世代の人材育成にもつながっていきます。

NGOとの協働でできること

ビジネスの目的は利益を生み出すことだけでなく、どのような社会的価値を生み出すかが重要であると捉える若い人たちが増えています。そうした取り組みをしていない会社には魅力を感じないのだと思います。今後はこうした若い世代が、企業のバリューを高めてくれることでしょう。プランのようなNGOには、彼らの心に届くような情報発信を期待します。さらに将来的には、お互いのノウハウを交換し、学び合うための人材交流のようなプログラムが実現できたらいいですね。

「南スーダン・シリア難民を対象とした包括的保健プログラム」担当
中島泰子職員（プログラム部）からひとこと

プロジェクトの進捗に関して、従業員の皆さまやCSRチームから寄せられる喜びの声や感想は、私にとって大きな励みとなります。これからも現場スタッフ一丸となって頑張ります。

- 南スーダン・シリア難民を対象とした包括的保健プログラムについては、以下をご参照ください
  https://www.plan-international.jp/news/info/20170630_3928/
- 企業連携に関するお問い合わせ先：企業連携担当　TEL：03-5481-7100 / Mail: hello@plan-international.jp

遺していく資産を社会貢献に生かせるプランの「遺贈寄付」をご紹介します

「プラン・ニュース」No. 108の本欄でも取り上げましたが、
近年、自身の財産を社会貢献に生かす方法として「遺贈」を考える方が増えています。
今回は、広報マーケティング部で遺贈寄付の受け入れを担当している山形職員が、
遺贈をめぐる最近の潮流や、プランの遺贈寄付の特徴などについてお伝えします。



山形 文職員
広報マーケティング部・寄付受付担当統括



文京区社会福祉協議会主催のセミナーにて

遺贈を考える方が増えている理由

遺贈とは、自身の財産を遺言によって法定相続人以外の人や団体に譲ることです。少子高齢化がすすむ日本では、近年、子どもを持たないなどの理由で身近に資産を継ぐ人がいない人が増加しています。遺された資産は親戚などの法定相続人が相続するか、相続人が誰もいないときには国庫に納められます。

「遠い親戚や国よりも、自分が選んだ社会貢献活動に役立ててほしい」と考える人が増えています。相続をめぐる争いを起こさないように、遺言の書き方を紹介する書籍やテレビ番組をよく目にするようになりました。遺言を作成することがより身近になっているのではないでしょうか。

プランの遺贈寄付受け入れとその特徴は？

こうした社会的潮流を受け、近年では「終活セミナー」が各地で開催され、多くの人たちが参加しています。プランも東京・文京区や横浜・青葉区などのセミナーに招かれ、遺贈寄付受け入れの具体的な事例などをご紹介しています。

将来、プランへの遺贈寄付をお考えの方には、その使途についてご希望をおうかがいしています。交流しているチャイルドの暮らす国での活動資金に充ててほしい、といった声をいただき、より思い入れのある地域や分野をご指定いただけるようにしています。

プランがお受けできる資産は、預貯金など現金が原則ですが、不動産や有価証券なども個別に検討させていただいています。自身で築き上げた資産が世界の子どもたちを育む活動に生まれ変わり、子どもたちを応援する力となって生き続ける。そんなプランの遺贈寄付受け入れについてご関心をお寄せいただき、さまざまな選択肢のひとつに加えていただけたらと思います。

プランへの遺贈を決めてくださったスポンサーの方（70歳代）のコメント

長年のスポンサーです。プラン・インターナショナルとのお付き合いはもう15年にもなります。その間、夫婦でアジアの国にチャイルドを訪ねて行って、楽しい経験を何度もしてきました。私たち夫婦には子どもがなかったので、漠然と夫婦の死後、資産を残せたら途上国の子どものために役立ててほしいと思うようになりました。考えてはいても忙しい日々の中、なかなか行動に移せずにいましたが、昨年夫を亡くしたのを機に、手続きを始めようと思いました。プランはしっかりした団体で相談にものってくれたので、専門家の助けも受けながら遺言作成をすることができ、ほっとしています。

お気軽にお問合せください

遺贈・相続の手続きなどを詳細に説明したパンフレットをご希望の方は
下記までご連絡ください。
遺贈・相続担当　TEL：03-5481-7100
Mail：izou@plan-international.jp





チャイルドのディルベルくん

チャイルドに会ってきました！

チャイルドの学校で一緒に紙飛行機を飛ばしました

昨年8月、チャイルドと同学年の娘さんをともない、初めてコミュニティに訪問した笠原さん。小学校でチャイルドの家族や児童たちと交流しました。

スポンサー **笠原和起**さん／埼玉県　チャイルド **ディルベル**くん（訪問時９歳）／ボリビア

寄付が役立っていると実感

プランのスポンサーになって15年が経った昨年、念願のコミュニティ訪問に行ってきました。現在のチャイルド、ディルベルくんと私の娘は同学年。彼女に文化の違いなどを学んでほしいとの思いもあり、一緒に訪問することにしたのですが、携帯電話の電波も届かず、家庭には電気も来ていない訪問先のコミュニティはもとより、ラパスのような都会でも文化の違いにショックを受けていました。

私たちが滞在していたタリハのホテルからコミュニティまでは車で4時間以上。アンデス山脈の谷間、標高約３０００mにある小さなコミュニティは、桃の産地として有名で、まさに桃源郷のような美しい村でした。

今回の訪問は、ディルベルくんが通う小学校で行われ、児童全員で踊りなどを披露してくれました。その後一緒に紙飛行機を折り、みんなで飛ばして遊んだのはいい思い出です。ご両親も大歓迎してくれて、茹でたじゃがいもや手作りチーズ、干し桃のジュース、そしてお父さんが特別に川でとってきた沢ガニを茹でたものなどで、もてなしてくれました。

時間の関係でプランのプロジェクトは視察できませんでしたが、学校では読み書きや算数などに加え、彼ら独自の文化の教育にも力を入れていることがわかりました。プランが現地のコミュニティに受け入れられている様子を見て、自分の寄付が役に立っていると感じることもできました。

※現在、チャイルドとの面会は、自宅ではなく学校などの集会所で行われています



ディルベルくんの家族と一緒に記念撮影

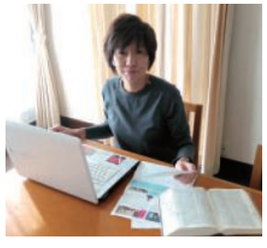


校庭で紙飛行機を飛ばして遊びました！

「翻訳ボランティアになって20年以上になります！」大庭真子さん／神奈川県

１９９５年からプランの翻訳ボランティアをしてくださっている、神奈川県在住の大庭さん。20年以上もボランティアを続けてくださっている理由は？

「ボランティアはしたいけど、あまり時間は割けないし、寄付する余裕もない。好きな英語を使って、家にいながらできる翻訳は、ちょうどよかったのです。翻訳をしながら、現地の教育や生活事情、子どもの愛国心まで垣間見られて、一石二鳥、三鳥だと思っています。以前はよく『毎日水を汲みに○○キロ』という文章がありましたが、最近はあまり見なくなって『支援の成果かな？』とうれしくなったり……。そんな経験もあって、昨年から水道の国際協力の仕事に就きました。海外とのメールのやりとりや研修資料の翻訳などをしているのですが、何というつながり！と小さな満足を感じています」



自宅で翻訳作業中の大庭さん

広報
マーケティング

支援に対する熱い思いを多数お寄せいただきました！



本件を担当した津田恵美職員（広報マーケティング部）

昨年12月上旬、メールアドレスをご登録いただいており、かつメールマガジンのご登録をいただいている約2万人の支援者の方々へ、広報マーケティング部から一通のメールをお送りしました。その内容は、「プランへご支援をくださるきっかけや思いなどをぜひお聞かせください」というものでした。

この件を企画・担当したのは、同部の津田恵美職員。入局以来10年以上支援者サポート業務に携わり、電話やメールなどで支援者の皆さまと接してきた経験から、「支援者の方々ともっと積極的に交流する機会をもちたい」との思いを形にしました。

当初は１００～２００通くらい返信をいただければ、と思い送信しましたが、実際はその予想をはるかに超える約５００通の返信が。うれしい驚きでした。しかも、プランを知ったきっかけ、支援を始めた背景や経緯、現在も支援を続けている思いなど、優しい気持ちのこもったメールが多数あり、あらためてプラン支援者の皆さまの温かさ・素晴らしさを実感する結果となりました。

皆さまからの返信メールは、現在も時折届き、津田職員が一通一通拝見し、順次お返事をお送りしています。さらにいただいたメールは事務局の職員に共有され、「励まされた」「疲れが吹き飛んだ」などの声がそこかしこからあがりました。津田職員は次のように話します。「一通一通メールを読むことで、お一人おひとりの真摯な思いに触れることができました。皆さまからのメッセージに全職員が勇気づけられるとともに、改めて仕事の意義を感じています。今までは機会が限られましたが、できる限り皆さまのお気持ちをうかがう機会を増やしたいと考えています」。

お忙しいなかで、メールへの返信をくださった皆さま、ありがとうございました。

寄せられたメッセージ

18歳になったアフリカの女の子はチャイルドを卒業し、教師になりたいと手紙に書いてきています。交流中、彼女の国が政情不安なときは無事でいるだろうかと気を揉み、何らかの事情で小学校に通えなくなっていた時期には心が痛みました。今自分が生きている世界、この日本の時間だけが常に絶対ではないことを実感しています。

バングラデシュのチャイルドから送られてくる手紙の内容にいつも励まされ、背筋が伸びる思いがしています。初めてのお便りが届いたとき、初めて見る文字、意味も発音もわからない一方で、その文字の連なりや勢いを美しいと感じ、いつか自分で読めるようになりたいと思いました。目下、新しい言語を学ぶ苦労と楽しみを味わっております。

公式ウェブサイト内「支援者の声」でも
皆さまからいただいたメールをご紹介しています　**https://www.plan-international.jp/about/voice/**

COFFEE BREAK　職員が紹介するカルチャー

プランと同じテーマに取り組む歌姫シャキーラ

紹介する人：広報マーケティング部　山形文 職員

シャキーラは、プランの活動地域である南米コロンビアのバランキージャ県出身です。10代でデビュー以降、活躍を続けています。2010FIFAワールドカップ南アフリカ大会でテーマ曲『ワカワカ』を歌い、世界中を魅了したことを覚えている方も多いでしょう。彼女は子どもたちを暴力から保護する基金を設立するなど、プランの活動と共通するテーマにも取り組んでいます。今はサッカーのスペイン代表選手と結婚して一児の母となり、貫禄を感じるシャキーラですが、この作品は、まだアーティストとしては初々しいころのもので、私の大好きな一枚です。

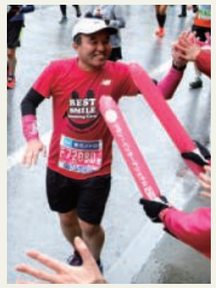


『裸足のままで』Pies descalzos

販売元：株式会社ソニー・ミュージックエンタテインメント　価格：2,233円（税抜）
© Sony Music Entertainment

東京マラソンへのご参加ありがとうございました！

2019年3月3日に東京マラソンが開催されました。冷たい雨のなか、増田明美さんから応援ビデオメッセージを受けた国内外からの約130人がプランのチャリティランナーとして出走されました。今年はスタッフやボランティアに加え、支援者のご参加もいただき、プラン応援団は沿道3カ所で精いっぱい声援を送りました。ゴール後にはランナー専用ラウンジを提供し、好評をいただきました。ランナーの皆さま、当日応援に参加された皆さま、ありがとうございました。



チャリティランナーとして走ってみませんか？

撮影：金井塚太郎／プラン・インターナショナル

プラン支援者の会からイベント開催のお知らせ

あなたも参加しませんか？

山形・秋田プランの会

❶「第33回山形・秋田プランの会　第12回総会」
- 日時：4月21日(日)　13時～16時30分

※日付が、年次報告書でお知らせしたものから変更になりました(4月14日→4月21日)
- 会場：にかほ市象潟公民館／にかほ市象潟町狐森31-1

❷「第34回山形・秋田プランの会」
- 日時：7月7日(日)　13時～16時30分
- 会場：山形テルサ3F 研修室B ／山形市双葉町1-2-3

❶❷共通
- 内容：プラン職員の講演、チャイルドへの手紙書き、参加者同士の交流
- 参加費：500円

※❷は7月4日(木) までに下記へお申し込みください
- 連絡先：岩谷
  Mail：tadaya-i@chive.ocn.ne.jp

プラン広島の会 f

「チャイルドへのお手紙書き会」(毎月開催)
- 日時：4～7月　各月の第3日曜
  14時～16時
- 会場：広島市まちづくり市民交流プラザ フリースペース(2Fまたは3F) ／広島市中区袋町6-36
- 内容：チャイルドへの手紙書き
- 参加費：無料、事前申込不要
- 連絡先：小村
  Mail：naokomura@kej.biglobe.ne.jp

プラン名古屋の会 W f

「プラン全国支援者の会」
- 日時：6月1日(土)　10時～17時(開場9時30分)
- 会場：イーブルなごや／名古屋市中区大井町7番25号　https://e-able-nagoya.jp/tours/access/
- 内容：「プラン全国支援者の会」を名古屋で開催。プランの池上清子理事長と棚田雄一専務理事を交えて支援者同士で交流し、意見交換をします。参加できない方からもたくさんの投稿を募ります。
- 参加資格：全国のすべてのプラン支援者
- 定員：100人
- プログラム：
  10時～　開会、自己紹介等の懇談会
  12時～　昼食時　会場にてお弁当
  13時～　午後の部開会の挨拶、各支援者の発表、意見交換
  16時～16時30分　まとめ、閉会
  17時～　懇親会(場所移動)
- 費用：参加費1,000円、お弁当1,000円、懇親会4,000円ほどを予定
- 申込方法：お名前、郵便番号、連絡方法を明記の上、参加希望のセッションを次の番号でお知らせください(1：午前 2：午後　3：懇親会)
- 問合せ・申込先：プラン名古屋の会
  Mail：info@plan-nagoya.sakura.ne.jp
  プラン名古屋の会代表　安藤良一
  〒453-0862名古屋市中村区岩塚町5-45
  TEL：090-8076-2278／
  FAX：052-412-3824

※注意：お問い合わせは、プラン名古屋の会までお願いします

プラン群馬の会

「プラン職員による活動報告会」
- 日時：6月9日(日)　13時30分～16時
- 会場：前橋プラザ元気21　5階 学習室／前橋市本町2-12-1
- 内容：プラン職員による活動報告、参加者同士の交流
- 参加費：500円

※参加希望の方は、6月6日(木) までに下記へご連絡ください
- 問合せ・申込先：星野
  Mail：kaoru_hoshino@hotmail.com

多摩SP会 W

「映画上映会」
- 日時：6月29日(土)　13時30分～16時(受付13時～)
- 会場：立川市子ども未来センター B1多目的室／立川市錦町3-2-26
- 内容：華やかなファッション業界の裏側と知られざる真実を描き出した話題のドキュメンタリー『ザ・トゥルー・コスト～ファストファッション 真の代償～』を上映します。映画の詳しい内容については、下記のウェブサイトをご覧ください
  http://unitedpeople.jp/truecost/
- 参加費：500円

※事前申込み：不要

※年齢制限はありませんが、字幕映画(フリガナなし) ですのでご注意ください
- 連絡先：矢島
  Mail：tama-web3@ngo-npo.org

W ウェブサイト f フェイスブック
上記アイコンのある会については、以下のプラン・インターナショナルウェブサイトから、各会のページにリンクできます
https://www.plan-international.jp/supporter/plankai/

■ 支援者の会に関するお問い合わせ先：
リレーション開発部　TEL：03-5481-6100

※「プラン・ニュース」No. 111は、7月上旬にお届け予定です

広告が新しくなりました

「遠い国の女の子の、私は親になりました。」

今春より広告が新デザインになりました。チャイルドの多くは親や保護者と生活していますが、大人たちの多くも貧困や差別のなかにあります。子どもたちを守り、彼らの可能性を育むには、負の連鎖を断ち切り、グローバルな視点でチャイルドと地域を支える存在が必要です。直接的な金銭の援助ではなく、チャイルドたちが暮らす地域を総合的に向上させるのがプランの手法。そんなプランとともに歩んでくださるスポンサーの方々を「社会的な“親”」と捉え、思いをコピーに託しました(従来のプラン・スポンサーシップの活動やスポンサーとチャイルドの関係性に変更はありません)。



関東圏では一部電車内に掲示されています

「夏休み読書感想文コンクール2018」の表彰式が行われました

2018年に節目の5年目を迎えたプランの「夏休み読書感想文コンクール」は、初めて文部科学省の後援を受けました。22都道府県と海外の中高生から979作品の応募があり、厳正な審査の結果、中学生、高校生各3人が個人賞を受賞。

昨年11月18日に行われた表彰式の入賞者インタビューでは、課題図書の主人公である女の子や女性がもつ勇気、本を読み触発されたことを実践に移すために心がけていることなどについて語ってくれました。審査員長で直木賞作家の角田光代さんからは、「読書を通じて想像力を働かせることが重要であり、途上国の女の子たちが学校に行けないと何がよくないのか、なぜ学校に行ったほうがいいのか、たくさん想像してほしい」とのコメントをいただきました。

表彰式後には体験型ワークショップ「私が大統領になったら」を開催。途上国の大統領になったらどんな国を作りたいか、その実現のために何をしたらよいのかを皆で考えました。各グループが大統領選の候補者演説を行い、子どもも大人も楽しみながら途上国への支援のあり方を考えました。

※入賞作品と講評、学校賞コメントは、以下のウェブサイトをご覧ください。
https://www.plan-international.jp/news/event/20181121_13014/



池上清子理事長（中央）を囲んで記念撮影

2019年4月・5月口座引落日変更のお知らせ

2019年4月27日（土）から5月6日（月）までの連休にともない、プラン・インターナショナルへの毎月の寄付（プラン・スポンサーシップ、ガールズ・プロジェクト、グローバル・プロジェクト）の口座引き落とし日が、下記の通り大幅に変更となります。

	本来の引落日	2019年の引落日
ゆうちょ銀行口座の場合（毎月1日）	5月1日	5月7日
その他金融機関口座の場合（毎月27日）	4月27日	5月7日

プランへの寄付となる商品のご紹介

シチズン時計株式会社のソーシャルキャンペーン“New TiMe, New Me”

シチズン時計株式会社はBecause I am a Girl（BIAAG）キャンペーンに賛同し、レディスウォッチブランド「xC（クロスシー）」の売り上げの一部で継続的に途上国の女の子をご支援くださっています。2019年4月には、BIAAGキャンペーンとタイアップした特別限定モデルを発売。「始まりは小さな選択だとしても、世界を、ほんの少し変えられるかもしれない。」と呼びかけるシチズンのソーシャルキャンペーン“New TiMe, New Me”でも、プランと協働してくださっています。詳細は下記ウェブサイトをご覧ください。
https://citizen.jp/newtime-newme/



CITIZEN xC for Because I am a Girl Special Model

BOLIVIA

ボリビア

チャイルドの一日、紹介します！

プランのスポンサーと交流しているチャイルドの一日を紹介するシリーズの第3回。今回は南米ボリビアから！



7：00　起床

私は今、両親と兄の4人で暮らしています。朝起きたら身支度をして、7：30から朝食。いつもマテ茶か紅茶かコーヒーを飲みながら、パンを食べます。





8：00 〜 13：30　学校

私が一番好きなのは語学の授業。理由は、おしゃべりが大好きだから（笑）。私の学校では、10：30に2度目の朝食が食べられるんです！





14：30 〜 17：30　プランの活動

普通は授業が終わったら家に帰りますが、毎週金曜日は学校でプランの活動をしています。私はグループのリーダーを務めていて、仲間と一緒に思春期の問題や将来の夢、自尊心をもつことの大切さなどを話し合っています。また、私たちのコミュニティをよくするための活動もしていて、この前はクラブのリーダーとして、行政官の前で発表もしました！



夕方〜夜



夕方は友だちと遊んだり、宿題をしたりする時間。夜はお母さんの夕食作りを手伝って、テレビを見たりします。寝る前には外に出て、星を眺めるのも大好き！　私の将来の夢を叶えてくださいってお祈りするんです。

プランのSNSをフォローしてください

プラン・インターナショナルのFacebook 、Instagram 、Twitterで活動国の情報や事務局の日々のあれこれを発信中！

※「国際NGOプラン・インターナショナル」で検索してください。

@Planinternational.jp　@planinternationaljapan　@Plan_Intl_jp

PLAN NEWS
2019 SPRING NO.110

公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン
〒 154-8545 東京都世田谷区三軒茶屋 2-11-22 サンタワーズセンタービル 10F
TEL：03-5481-6100　FAX：03-5481-6200
www.plan-international.jp

表紙写真：エクアドル